

東洋學報

第參拾九卷第四號

昭和三十二年三月

論 說

唐代における中國語語頭鼻音の

Denasalization 進行過程

水 谷 眞 成

- 一、はしがき
- 二、資料の説明
- 三、資料の示す特質、地理的時間的な問題
- 四、これ等諸聲母の音變化についての解釋
- 五、あとがき

附、資料

- 一、語頭の「鼻音の弱まり」を起した漢字（附表の一）
- 二、大唐西域記における外國語音をあらわす漢字の語頭鼻音
- 三、*na*、*nya*、*na*（附表の二）

一、は し が き

唐代の北方音において、語頭に鼻音をもつ「明」「泥」「疑」「日」の諸聲母の語が、語末に鼻音をもたない場合、聴覺上この鼻音要素をなくして、ほとんど純粹な口腔音のような音となる現象があることについては、古く Henri Maspéro

1

唐代における中國語語頭鼻音の Denasalization 進行過程 水谷

第參拾九卷

三三七

氏が指摘されているのであるが、氏は「八世紀の不空 (Amoghavajra) の音譯字に見えるものゆえ、おそらく七世紀に長安に起つた現象であろう」と推論しているのみで、その進行過程も全く不明であり、また、マスペロ氏以後の研究でも、不空をこの傾向の代表者として見なして來た様子であり、切韻の「日」母が³な³かの論争も不空前後の資料を中心として論争されたのであるが、このようなことは、不空譯經開始の約二十年前 A.D. 七二〇年に撰述せられた「日本書紀」にも、すでに、この一類の文字を鼻音でない濁音として使用していることを考え合わせるだけでも、當然不空前にこの源流を求めた上で行なわなければならないものであつた。⁴

この音變化は、音韻の機能には關係のない變化であつたため、漢字における聲類の分類、對立には何等の外見的な變化もなく、ただ外國語音との對應の場においてのみ推定が出来るのである。

いま、マスペロ氏の方法に倣い、陀羅尼に見える梵語と、その音譯漢字とを對比して、この傾向の進展する姿を見てみよう。

註

(1) この現象を Denasalization と言つているが、譯語として如何なる語が用いられているかまだ聞いたことがないので、いまここでは假に「鼻音の弱まり」「鼻音弱化」等と呼ぶことにする。

(2) Henri Maspero: *Le Dialecte de Tch'ang-ngan sous les T'ang*. BEFEO, tome XX, No. 2 (1920).

(3) この「日」母の切韻音をカールグレン氏は³と推定し、マスペロ氏は²とした。李榮氏のマスペロ説を支持する根據も、

所謂「圓明字輪」とか「根本字」に見えるもののみを資料としてのことである。

(4) 日本書紀の用字法が、陀羅尼のその影響を受けているであろうことは、私も極めて可能なことであるとは思つのであるが、後に見るように年代的に「鼻音弱化」盛行時代と餘りにも接近している。國語學者はこの關係をほとんど既定の事實として見てゐるようであるが、私は寡聞にしてこの關係を追求した專論を見たことがなくこれは安易に結論づける前に、いま一層深く考えるべきものではなからうかと思つてゐる。なお我が國の點

本における清濁音の表記については別稿を準備する心積りでいる。

二、資料の説明

私がつどり得た有聲音に對する鼻音文字使用の確實な最上限は智通の譯經においてであつた。ついで A.D. 六五三—六五四の阿地瞿多における例があるが、この二者に少數ながら「日」「明」兩母の「鼻音弱化」文字使用例が見られるのである。

ところが、この兩者につぐ地婆訶羅、杜行顛の兩人には全くこの傾向を見せていない。杜行顛の傳の詳細は知り得ないが、京兆の人で官途についていた人であり、さらに地婆訶羅の譯經にも關係があつたということは注意すべきことである。

さらにやや降つた A.D. 六九三—七〇六まで譯經をした寶思惟は、その梵名阿爾眞陀にも見られるように「鼻音弱化」文字を使用していて、譯經に使用されるこの傾向の文字の種類・頻度も漸次増加して來ている。

A.D. 六九三に來支した菩提流志においてはほとんど完全に諸調音部位の「鼻音弱化」文字の使用が行われ、かれをこの傾向進行過程の山と見做すことが出來よう。

寶叉難陀を通じて義淨となるのであるが、義淨には全くこの傾向が見えない。かれの出生し、成長した土地が河南齊州（今の山東省濟南）というような遠隔の地で、さらに中年を域外に過したためにかれの音韻觀念は、中原のそれと距離があつたであろうことが容易に想像出來るのである。

次に京兆の人慧苑である。かれの傳は不明であるが、その師承關係から、かれの華嚴音義述作は A.D. 七〇〇—七二〇頃と見られるであろう。この長安人にもこの傾向の文字が使用されているということは、長安人最初の使用という點で、後述するように梵音 *jam* に「染」という語尾に鼻音をもつ字をあてている點と共に注目されるべきであらう。

この後、善無畏、金剛智、不空、慧琳と次第してこの傾向に沿い進んで行くのであるが、この様相の大體は從來マスベロ其の他の諸氏に詳述されている。⁽³⁾

「鼻音の弱まる」傾向が智通まで溯べれることとなれば、A.D. 六四六に撰述せられた玄奘の大唐西域記に見える從來音聲的には不明と考えられていた阿奢理貳伽藍の「日」母「貳」は、一般に *ji*・時である對應を考え合わせ、軽い口蓋摩擦を表わすものと見て、「鼻音弱化」の初期の姿であろうと推論することも大きな無理がないこととなるであろう。

註

- (1) 義浄が西京に行つたのは咸亨元年(D.A. 六七〇)かれの三十六歳の年のしばらくの期間であり、翌年には渡海している。
- (2) 拙稿「慧琳音義雜考」(大谷大學支那學會編「支那學報」創刊號、昭和三十一年三月)で、華嚴音義撰述の年代推定をした。
- (3) マスベロ前掲書。羅常培「唐五代西北方言」(一九三三)。有坂秀世「メイ(明)ネイ(寧)の類は果して漢音ならざるか」(「國語音韻史の研究」所收)。小川環樹「你と爾および日母の成立」(言語研究二四、一九五三)。拙稿「慧琳の言語承譜」(佛教文化研究第五號、一九五五)。

三、資料の示す特質、地理的時間的な問題

附篇の資料に見えるように、有聲音に對する鼻音文字使用の傾向は、智通・阿地瞿多における種類・頻度の低いものから、漸次種類・頻度も共に幅のあるものに末廣がり、何等語における位置的條件の制約もなく、次第に増大して行くのであり、従つて、これと並行し逆比例して従前慣用の文字も使用されていることは、從來の諸家に看過されていた事實であるが、この二重表記の推移は、一方は濁音表記の資格消失(即ち全濁音の清音化)を、一方はその資格獲得(即ち鼻音の弱まり)の過程を如實に物語るものであると見られよう。音韻の不均衡は意外に長い時間續くものである。

智通が陝州安邑の出身で、主として洛陽の譯經館で勉強したと、玄奘が洛陽縣の生れで、少壯時代を洛陽で過したと、この類似した經歷の持ち主に早くも「鼻音の弱まり」の傾向を見せているということは、従来の「この傾向は七世紀の長安に起つた」という説に對し、更に限定して、「隋末唐初（七世紀初頭）すでに洛陽にまで擴がった現象であるから、長安においてはそれ以前に發生したものであろう」と推測出来るのである。しかし、このように解する時に困ることは、七世紀後半の京兆の人杜行顛およびかれと關係のある地婆訶羅の從來の慣用法だけを固守している舊派のあり方であるが、このことは、杜行顛が、略傳にも見えるように、たとえ梵書語に精通していたとしても、明らかに他の譯經僧とは異つた教養の人であり、あるいは、この點に不連續線の主たる原因を求められるのではなからうか？。

註

(1) 玄奘は傳によると、武徳元年（A.D. 六一八）長安におもむくのであるが、當時名僧はすべて難を蜀にさけて、長安には人無き有様であつたので、玄奘も直ちに成都に向つて出發している。後に印度より歸朝（A.D. 六四五）しその翌年大唐西域記を撰述するまで、長安に長期間滞在したという事實は見られない。従つ

て、かれの音韻は洛陽語のそれであると見て間違ひあるまい。

(2) 智通・阿地瞿多と寶思惟・菩提流志の間をつなぐ人は杜行顛・地婆訶羅の兩人だけではないのであるが、矢張り、人および譯經の見るべきものなく、あるいは譯經の一時的衰微を來たした時期とも言うべきであろうか？ この中間の時期の問題は後にさらによく調べてみたい。

四、これ等諸聲母の音變化についての解釋

このような一連の現象を私は次のように解する。

第一に考えなければならぬことは、「有聲音の無聲化」ということである。この點に關する私の見た最も早い例は、玄奘の大唐西域記および玄應の一切經音義（A.D. 六六一成）におけるもので、摩擦音「匣」母の字がイラン語およびその他の外

國語の **gh** 即ち [r] に對應して使用されている從來の用法、および音の入りワタリを表わすために使う用法、この二法のほかに、梵語語頭の **h** を表わす新しい用法が見えている。この新しい用法は有聲摩擦音「匣」母がすでに無聲化を始めて來ていることを物語るものである。

恐らく同じ頃、いま一つの有聲摩擦音の「禪」母にこの現象が現われたものようである。思うに、摩擦音および破裂音は單純破裂音に比して、調音部位も廣く、面的性質をもつものであると言えようし、従つて調音方法も浮動し易く、變化も起り易いものであろう。この傾向は唐末五代にかけての西藏文字、ブラフミー文字による漢字音轉寫の文獻にも見得る特徴と共通するものである。

この「禪」母の無聲化は、從來梵文の硬口蓋において行う有聲破裂音 *ja*・*jha* に對應していた「禪」母がその對應の資格を消失することを意味するものである。一方、隋末唐初に從來の口蓋鼻音「日」母 [ŋ] は稍々摩擦性を帯びた一種の摩擦音的性質の [ŋz] に變化し始めて來ていたため、梵文 *ja*・*jha* に對しては、無聲化を始めた「禪」母より一層近い音感を抱かれる場合も生じて來て、ここに、「禪」「日」兩母の混用が次第に現われて來たものであると解せられるのである。

この傾向は菩提流志において從來の表記「禪母」を使用しつつ、音註には「日」母の反切上字を使用している點に明瞭に見受けられるのである。

この二重表記は、不空を経て慧琳の梵語正音表記にも現れているのであるが、これを一方は從來の慣習的な表記、一方は審音的な表記であると、二系列の並置と見るよりは、

$h \langle m' \rangle \langle hz \rangle m'$

と推移して行く變化が、まだ聽覺的に完全に鼻音を落した唐末五代の「禪」：[s]、「日」：[z] となりきつていない段階の

のであると見る方がよからうと考えるのである。⁽⁸⁾

他の鼻音聲母も「日」母に遅れはしたが、やはり鼻音要素を衰退させる同様な傾向を起し始めたことは資料の例に見る通りである。⁽⁹⁾

ところで、「日」母の語頭鼻音衰退の現象は頭初より一律に起つたものではないらしいのである。大唐西域記の例においても、また智通その他の例にも見えるように、「鼻音の弱まり」を起すものは、ほとんど語末に鼻音を持たない文字においてである。金剛智においては、「穰」という、本来、語末鼻音ngをもつ文字を使用していながらその反切下字には「佉」と鼻音をもたないものであることを注意してさえるのである。おそらく、他の實思惟の例もこれと同様なとり扱いであつたと考えられるのである。⁽⁸⁾

しかし、語末鼻音をもつもの、すなわち所謂陽聲と、もたないもの、すなわち陰聲との對立は、從來マスベロ氏等の考えているような恆続的なものではなかつたのである。成る程、陽聲のものは語末鼻音の前向同化 (progressive assimilation) により「鼻音の弱まり」の進展は遅れてはいたのであるが、善無畏の字門⁽⁹⁾においてはja・若、na・壤と語末鼻音の有無によつて語頭子音の鼻音要素の有無を區別しているにもかかわらず、ほぼ同時代の慧苑においてはjam・染の對應が見えること等よりすると、ほぼ八世紀初頭頃より陽聲の方も語頭鼻音の弱まりが始まつたのではないかと考えられるのである。

従つて、言いかえれば、「日」母陽聲もこの頃から梵音に對應する資格を消失し始めた譯であり、さてこそ不空においてja・「日」母陰聲、na・「泥」母三等陽聲——これは他のものが「鼻音の弱まり」を起した後に残つた唯一の純粹口蓋鼻音聲母である——の對應を新らしく字門に規定したわけなのである。このことは、また、梵音においてnaと理論的には區別されながら、實際上ほとんど同音として取り扱われるnyā⁽¹⁰⁾では、玄奘およびその前後の人が梵語 *anāya* を阿練若と「日」母陰

聲を以て表わすのに對し、**慧苑**は壤、或は壤と「日」母陽聲を以て表わし、さらに、**慧琳**は孃と「泥」母三等を以て表わすというように、次々と異つた調音の文字を工夫していることも、「日」母の音變遷を物語る一證となるであらう。⁽¹⁸⁾

註

(1) 例えば次のような例がある。

Skt. *nāgīya* 曷羅闍結利呬城(西域記、京大本九ノ二五)

Skt. *vāhula* 曷邏怛羅僧伽藍(〃、〃、〃 一ノ三八)

Skt. *manoratha* 末笈曷刺他(〃、〃、〃 二ノ三二)

因みに、「匣」母の字をこのように用いる例は古くからあるように言われているが、例證典據も見られない。私の見た最も古い例は隋代の次のような例である。

Skt. *vāja* 曷囉闍 闍那崛多譯起世經(A.D. 五八五—六〇〇譯)
〔大正一、三六二下〕

闍那崛多の譯經にはこの種のものが他にも見える。

(2) 西域記に於

Skt. *harsavaradhana* 曷利沙伐彈那(京大本五ノ四)

Skt. *vāhula* 曷邏怛羅僧伽藍(〃 一ノ三八)

玄應音義の梵語正音では

Skt. *haryia* 曷利孃(山羊也)(大治本一ノ一五オ)

Skt. *irada* 賀邏駄(此云池)(〃 五ノ三ウ)

Skt. *brāhmanya* 婆羅賀摩孃(〃 六ノ八オ)

このような玄奘および玄應の使用例から見ると、「匣」母の無聲化は遅くとも隋末唐初に洛陽にまで及んでいたことが推測出

來るのである。(もつとも梵文 *h* が有聲音か無聲音かは尙問題

があるが、この兩人の表記法が一般に梵文 *h* が「曉」母(無聲音)に對應し、上例と何等位置的條件の區別がないのを考え合せて、上例の *h* を無聲音を意識したものと判斷した。)

(3) 唐末五代の資料については、羅常培前掲書「F. W. Thomas: Buddhist Chinese Text in Brāhmī Script, ZDMG, 1936 ~ 1937.

ブラフミー文字資料については、私はある會合の席上發表をしたことがあり、材料を油印配布したことがあるが、活字にして發表する機會をまだ得ていない。但し一部は前掲拙稿「慧琳の言語系譜」に引用紹介した。

(4) 梵文 *ja·jha* 等の口蓋音は元來破裂音として取り扱われているが、方音として轉訛したものは往々 [dz] のような破裂音となる、特に North-Western Prakrit と呼ばれるカシュミール以北、中亞を含めての地域の方音には古くから著しい事實である。従つて中國の譯經においても古い曇無德部のものとか、不空慧琳のもの等には梵文 *j* に [dz] の音價が考えられもしようが、ナイランダ學院隆盛時に渡印した音聲に嚴格な玄奘或は義淨がこのような方音化した音を意識していたとは考えられない。私は有坂博士のように「梵音 *j* (即ち *dʒ*)」(上代音韻攷二一

七頁)と一般的に規定することは、音譯漢字を音韻史研究資料として使用するには如何かと思つている。尙、梵文口蓋音に つらつは以下のものに詳しい。

J. Wackernagel: Altindische Grammatik, I, 1896, s. 187ff.

W. S. Allen: Phonetics in Ancient India, 1953, p. 52.
G. A. Grierson: The Pronunciation of Prakrit Pāla-
tals, JRAS, 1913, pp. 391ff.

中亞における口蓋音については、前掲拙稿においてふれた。

(5) 「日」母の「鼻音の弱まり」を起した原因は、廣い意味での破擦音化 affrication によるもので、中古音の特質の一翼をなしているものであらうと考える。この最も初期の姿が西域記に見える狭まい母音へ續く中フタリ Eingelten (E. Sievers: Grundzüge der Phonetik⁵, s. 181ff.) の口蓋摩擦の強化の例であらうと思う。その他の鼻音聲母の「鼻音の弱まり」は「日」母の現象にならう類推變化であらう。

(6) つまり、この二重表記は、その何れも對應の可能性をもつが、それは何れも近似音としてであつて、嚴密な意味での等價ではなく、時間の推移と共に一方は次第に近接し、一方は次第に離間して行くものである。

ただし、智廣の悉曇字記の有聲音における二重表記は少し違つた意味をもつている。それは表記法の二様性を示すものといふよりは、音聲そのものの二様性を示すことを意圖したもので

唐代における中國語語頭鼻音の Denasalization 進行過程 水谷

ある。かれは南天音或いは中天音と餘國音(これが北天音であることは前掲拙稿に詳記した)という言葉で原印度方言の音聲差異を示そうとしたのであるが、それは、おそらく、破裂の強弱、すなわち南中天硬音 fortis, 北天軟音 lenis と見ていたのではないかと考えるが、なお詳細は後に考えたい。

(7) この原因については(6)に述べた。

(8) ng 韻尾の問題については別稿を準備しているが、いま結論だけを述べると、梵漢對音その他の場から見て、この語末鼻音は七世紀の中葉頃より次第に鼻母音の姿に轉じ始め、八世紀初頭にはほぼこの變化は全 ng 韻尾に行きわたつていた。従つて、日本の古地名音の愛宕(アタゴ)の如く原 ng の姿を残しているものと、普通に口腔音となつた唐(タウ)等の間には、それが將來されるに當つての受け入れ方の相違よりも、もとの中國語音聲の差を考えなければならぬのではないかと推測している。

(9) 李榮「切韻音系」附表參照。

(10) 唐末五代の音、或いは日本漢音においては、「日」母陽聲も「鼻音の弱まり」を見せているのはこの理由によるに他ならない。有坂博士が正倉院の蒙求に見える「日」母陽聲が「ザ」行の形で表記されている點がマスペロ氏の考えと合わないことを不審に思つていられるようであるが、これはマスペロ氏の失考によるものであることを氣づかれないからである。(明)ネイ(寧)の類は果して漢音ならざるか「國語音韻史の研究三六四頁)

(11) 前記註(9)附表參照。

(12) 理論的には明瞭に n は口蓋鼻音、 ny は反轉鼻音と規定されている。 ny が拗音的調音であるから na とほとんど同音として取り扱われると言っただけでなく、實は印度原音自體 n の三者は

混同し易く、古くより n は往々 n および n の單なる文字上の一變型としてさえ見られたことがあるようである。なお、詳細は後の資料の項で述べる。

(13) 詳細は後の資料の項參照。

五、あとがき

以上に「鼻音の弱まり」の現象が隋末唐初から次第に展開して行く様相を歴史的にあらましとらえてみたのであるが、ここにその要をしめくくり、後に残る問題を整理し將來に備えたいと思う。

私がここで下した解釋は、

1. 語頭の「鼻音の弱まり」の傾向は隋末唐初すでに洛陽にまで擴がつていた。(おそらく長安における發生も時間的に餘り差がなく隋の中期以前には溯ばれまい。)
2. その最初は摩擦音「日」母等に現われ、漸次、他の調音部位に擴大して行つた。
3. 「日」母の「鼻音の弱まり」は語末鼻音のないものから始まり、語末鼻音をもつものも八世紀初頭には「鼻音の弱まり」を始め出した。

等という諸點であつたが、このように解するならば、日本書紀の用字法の解明も時間的に一層明瞭且つ合理的にならうし、唐末五代の音や、日本漢字音全般への連絡も容易となるであらう。

また、切韻の「日」母が n か ny かの問題を直接説明することは出来ないにしても、概むね、その周邊の事情も明らかとなり、従つて、八世紀中葉の善無畏、金剛智、不空等という人々の、抽象した字門のみを材料として切韻音を論ずることは、

少くとも音韻史研究者のとるべき態度ではないことも明らかにしたと思うのである。

このように見て来て、なお、不明瞭未解決として後の調査に残さなければならなかつた問題は、

1. 語頭の「鼻音の弱まり」が中古音の一つの特徴である調音方法が全體に狭くなる「破擦音化」に關連しておこつた現象であるとするならば、この「鼻音の弱まり」が全「破擦音化」現象の中で如何なる位置を占めるかということについては尙、よく考えねばならない。

2. 印度原音との連關が、いまなお、不明のままのものが多⁽²⁾い。

3. 「鼻音弱化」と輕唇音發生の時間的先後の問題⁽³⁾。

4. 「微」母陽聲の「鼻音の弱まり」の問題。これは、いまのところ、資料不足のため全く論じ得なかつた。

5. 七世紀後半、特にA.D. 六七〇—六九〇年頃の狀況。杜行顔のような教養を異にする人だけを資料とした點に心残りがある。この期は日本漢字音研究にとつて特に重要であるから、今後も精査する必要があると思ふ。

なお、多くの問題があるうと思ふのであるが、すべて將來の課題として残さねばならない。

註

(1) 「日」母のみに限定せず「漢然と」等」と言つたのは、西域

記における「赤鄂衍那」の例が不明のまま残つてゐるならざる⁹⁰。

(2) 例えば、「鼻音の弱まり」現象は不空・慧琳がもつていた音

系と考えられる西北印度方言にも見られるものであるが、これとの關連は今の所想像の域を脱しない程度にしか判明しない。

G. A. Grierson: On the Phonology of the Modern

Indo-Aryan Vernaculars, ZDMG, 49 (1895) pp. 393~421,
50 (1896) pp. 1~42.
do: Indo-Aryan Vernaculars, BSOS, I, pt. 2~3 (1918
~20).

(3) 印度文字には唇齒音 f はないが、元來雙唇音と言われる *Hamacandra* の文典等に見えるように唇齒音有聲の調音をするものも古くよりあるようであるから、この間の事情が判明すればあるは當面の問題究明の手づかすかも知れないの

である。一に專家の御教示を得たく願う次第である。

129 ff.

Siddheshwar Varma: *Critical Studies in the Phonetic Observations of Indian Grammarians, 1929, pp.* J. Wackernagel: *Altindische Grammatik, I, s. 196.*

W. S. Allen: *Phonetics in Ancient India, p. 57.*

(本稿は昭和三十一年度中國學會全國大會に於いて發表した原稿を訂補したものである。發表及執筆にあたり倉石武四郎、小川環樹の兩先生から種々御注意、御教示を賜つた。又、河野六郎氏から發表後直ちに本學報に掲載しよう御勧めを頂いた。茲に記して諸先生に心から感謝する次第であります。)

附、資 料

一、語頭の「鼻音弱化」を起した漢字

本論において、「鼻音の弱まり」の性格、および演變を考ふるにあつて主として使用した資料を譯者別に古いものから順に記す。

(舊)と標示した一群の漢字は從來の用法。

(新)としたものは「鼻音弱化」の漢字。

I 智通。陝州安邑人。隋大業中(A.D. 六〇五—六一七)出家。京師總持寺に住するも、後に洛京翻經館に梵書語を學ぶ。

イ、千眼千臂觀世音菩薩陀羅尼神咒經(大正藏經三〇、八四)〔貞觀中 A.D. 六二七—六四九譯〕

ロ、清淨觀世音普賢陀羅尼經(大正二〇、二一)〔永徽四年(A.D. 六五三)譯〕

(舊) 折 ji 跋折囉 vajra (イ、八四中)

是 ji 是訶囉 jilva (ロ、二二下)

III 地婆訶羅 (Dīvāhara)。中印人。儀鳳初年 (A.D. 六七六) — 垂拱末 (A.D. 六八八) 譯經。「鼻音の弱まり」は見られないが、梵語音轉寫に注意すべきものがある。

vacana 跋繕那 (大正十九、三五六上) / 伐折時折那 (大正十九、三五九中)

vāhanaprajāpti (*vāhanapāññanti) 婆訶那婆若爾炎致 (大正十九、五六三中)

ājivaka 阿字婆 (大正三、六〇五下)

IV 杜行顯 京兆人、儀鳳四年 (A.D. 六七九) 佛頂尊勝陀羅尼經 (大正十九、三五三) を譯しているが、「鼻音の弱まり」は全く見せていない。

V 寶應惟。梵名「阿爾真那」(Skt. *Ratnacinta*) North-Western Pkt. °cinda. cf. S. Sen: Comparative Grammar of Middle Indo-Aryan, 1951, p. 36.) 北印度迦濕蜜羅人。長壽二年 (A.D. 六九三) 長安に至り、その年より神龍二年 (A.D. 七〇六) まで譯經。義淨の譯場にも参加す。不空羅索陀羅尼自在王咒經 (大正二〇、四二二) [長壽二年 (A.D. 六九三) 譯]

(舊) 什 j 什筏囉 jvala (四二六中)

闍 ja 毘闍耶 vijaya (四二二三上)

(新) 擻 ja 囉擻 raja (四二六下)

耳 ji 阿波囉耳多 aparajita (四二四下)

孽 g 孽哩醯孽 grihna (四二九下)

ga 恒他孽多 tathagata (四三二上)

微 vi 微闍耶 vijaya (四二四下)

味 ve 烏波味賒 upaveṣṭya (四三〇上)

VI 菩提流志 (Bodhiruci)。南印人。長壽二年 (A.D. 六九三) 來支。その年より先天二年 (A.D. 七一一) まで譯經。一字佛頂輪王經

(大正十九、二二四) [景龍二年 (A.D. 七〇八) 譯]

j ja 惹而者反入・日・jī 爾・jo 邵儒照反

g ga 誡魚迦反・gi 倪魚根反

ḡ ḡa 拏尼加反

d d 努・da 娜・dih 溺爾反

v va(r) 鞞亡過反・vi 弭

不空羅索神變眞言經卷十 (大正二〇・三〇〇) [景龍元年—三年 (A.D. 七〇七—七〇九) 譯]

字門 (四十二字、五十字門の何れでもない) を示すが、上記に見えない單音としては「ba 麼」がある。

五佛頂三昧陀羅尼經 (大正一九・二六三) [景龍三年 (A.D. 七〇九) 譯]

ivalateja 入縛攤諦闍而者反

註

(1)(2) 「禪」「日」兩母の通用を明示している。

VII 實叉難陀 (Śikṣānanda)。于闐國人。證聖元年 (A.D. 六九五) — 長安四年 (A.D. 七〇四) 譯經。かれの譯經「大方廣佛華嚴經」

卷第七六 第七六 にある字門には全く「鼻音の弱まり」の文字は示さないが、實際の音譯漢字には見せている。

唐代における中國語語頭鼻音の Denasalization 進行過程 水谷

甘露陀羅尼咒(大正二、四六八)

哦 ga 幡哦嚩帝 bhagavate (四六八下)

彌 dy 恆彌也他 tad'yatha (")

訥 du(m) 吠努吠 dumdubhi (")

努 du " " (")

註

(1) 縮藏、大正藏經共に彼の譯經としているが、諸經錄には見えず、疑問が残るものである。

Ⅷ 義淨。河南齊州(今の山東濟南)人。貞觀九年(A.D.六三五)生。咸亨二年(A.D.六七一)渡海。永昌元年(A.D.六八九)南海寄歸

內法傳・西域求法高僧傳撰。久視元年(A.D.七〇〇)―景雲二年(A.D.七一一)譯經。かれの撰した字母(いま、安然の悉曇藏所收)

および譯經中の音譯漢字にも「鼻音の弱まり」の漢字使用は見られない。

Ⅸ 慧苑。京兆人。傳記の詳細は不明。かれの華嚴音義撰述はA.D.七〇〇―七二〇頃と見られる。音義中の正梵音を表わす漢字に

(舊) 闍 ja 琰摩羅闍 yamarāja

(新) 染 jam 染部捺陀 jambunada

末 ba 末利 bali

X 善無畏(Subhakarasiṃha)。中印人(西藏人とも云う)。開元四年(A.D.七一六)至于長安。開元五年(A.D.七一一)―二十三

年(A.D.七三四)譯經。

大毘盧遮那成佛神變加持經(大正十八、四一)〔開元十二年(A.D.七二四)譯〕

ja 若、na 壞、da 擎、da 娜、ga 哦、ba 摩、

XI 金剛智 (Vajrabodhi)。中印人 (南印人ともいう)。開元八年 (A.D. 七二〇) 來支。十一年 (A.D. 七二三) — 二十九年 (A.D. 七四二) 譯經。

金剛頂瑜伽中略出念誦經 (大正十八、二二三) [開元十二年 (A.D. 七二四) 譯]

(舊) 折 j 跋折囉 vajra (二三四中)

逝 ja 布逝 puja (二四四下)

(新) 入 j 入縛囉 jvala (二四五下)

日 j 婆日嚕 vajro (二四七上)

穰 ja 布穰而法反 puja (二五中)
供養也

壤 ja 帝壤 teja (二九下)

涅 d 涅哩荼涅哩瑟致 dr̥ḥa-dr̥ṣṭi (二五下)

娜 da 努佉掣娜 duhkaccheda (二四四中)

努 duh " " (")

爾 di 爾婆 dipa (二四六下)

網 va 薩網亡可反 婆縛亡何反 svabhava (二六上)

XII 不空 (Amoghavajra)。北天竺人。年十五師事金剛智。天寶五年 (A.D. 七四六) — 大曆六年 (A.D. 七七二) 譯經。瑜伽金剛頂

經釋字母品 (大正十八、三三八) [譯年不明]

唐代における中國語語頭鼻音の Denasalization 進行過程 水谷

XIII 慧琳。疎勒人。開元二十一年 (A.D. 七三四) 生。建中五年 (A.D. 七八四) — 元和二年 (A.D. 八〇九) 音義撰述。音義中、正梵音を

現わす漢字に次のような對立が見える。

(舊) 伽 ga 摩訶沒特伽羅 maha-maudgayayana (第六卷)

繕 ja 踰繕那 yojana (第一卷)

馱 da 羯囉馱迦 kalandaka (第四十一卷)

跋 ba 烏曇跋羅 udumbala (第八卷)

婆 va 阿那婆達多 anavatapta (第一卷)

毘 vi 栗曩毘 hicchavi (第二十九卷)

(新) 誡 ga 摩護囉誡 mahoraga (第一卷)

爾 ji 阿爾多縛底 ajitavati (第二十五卷)

拏 da 藥嚕拏 garuda (第一卷)

納 d 鉢納摩 padma (第三卷)

娜 da 額史娜曩 nisidana (第一卷)

謨 bu 彌謨 jambu (第一卷)

尾 vi 補囉縛尾禰賀 pūrva-vidaha (第一卷)

二、大唐西域記に見える語頭鼻音をもつ音譯漢字

中印度のナーランダ學院において正確な梵語を學習した中國人としては、玄奘がその第一人者である、ということについては何人も異論があるまい。音譯漢字を音韻史研究資料として使用する人々が、まず大唐西域記を出發點とするのも當然なのである。しかし、西域記に見える音譯語彙のうち、イラン語その他は別として、同一の梵語と見える語彙でも、幾種類かの轉寫様式をせていることがある。これ等のものはよく見ると、實は方音の差を表わしているのであるうと思はれるものが多い。従來、例外として除外されたこの類のものも、かかる點に注意をむけて取り扱うならば、一層多くの收穫が得られることとなるであろうと思ふのである。次下のは、従來例外の扱いを受けていたものもあるので、實例によつて私の意のあるところを汲まれたい。總括的な考察は機を見て發表したく思つてゐる。

大唐西域記に見える音譯漢字で、語頭に鼻音をもつ漢字のうち、「明」「泥」（この兩類の字は數多く見える）の兩聲母は、梵語その他の外國語音の純粹鼻音に對應していて問題はないのであるが、「日」「疑」の兩聲母のうちには少しく吟味を要するものがある。いま、この兩聲母に屬する文字を検討してみよう。

「日」母。 若、如、穰、攘、貳。

「疑」母。 御、鄂。

兩聲母に屬する文字は全部でこの七字である。

「日」母。

1、若。

この字を含む音譯語彙は次の四例である。

11、羯若鞠闍國 唐言曲女城國
中印度境 (京大本四ノ三〇)

Skt. *kanya-kubja*。この梵語は「せむしの女」を意味し、原註の「曲女」にあたる。西紀前一四〇年頃の Ptolemy の地理書にもすでに *ravortia* と記しており、五世紀初頭の法顯傳にも「罽𩇛夷」と記し、八世紀初葉の慧超傳にも亦「葛那及」と記してあることより見れば、玄奘訪印當時の地名もすでに *Kanani*, *Kanaj* のようなものであつたらうから、この玄奘の漢字表記は雅名としての梵語を意圖したものであらう。

掘謙徳：解説西域記、p.三四三。

A. Cunningham: Ancient Geography of India, 1924², p. 432.

M. L. Dey: The Geographical Dictionary of Ancient and Mediaeval India, 1927², p. 89.

H. Yule & A. C. Burnell: Hobson-Jobson, 1903², p. 435b

12、韓若國 (京大本七ノ二七)

玄奘が實地に聽聞し表記したものではなく、遠方にて傳聞したものである。あるいは前記 *Kanani*, *Kanaj* を指すかとも言われるが、今日まで決定的な比定は見られない。音譯漢字の面からもキメ手はなさそうである。

堀：前掲書 p.五三八。

F. Watters: On Yuan Chwang, II, p. 73.

13、阿若憍陳如 (京大本七〇三)

人名。Skt. *ajñātakauṇḍinya*。此の音譯は舊譯のもので、漢譯佛典にすでに普遍化しているためか、玄奘はそのまま襲用したものである。かれにとつては、もはや、中國語となつて歸化した語彙であつたろう。この轉寫は本來 Pkt. *amā* が對音と考えられよう。

14、發摩若僧伽藍 (京大本十二〇三二)

于闐附近の寺院名で、現在の Somiya であらう。シュリアン氏の考えるように Skt. *samājñā* が原語であらうかとすれば、

Skt. *samājñā* > Tib. *so-ma-ñā* or *sum-ñā*

のような變化が考えられ、この中間の一時期に玄奘が耳にしたことになるのである。

A. Stein: *Ancient Khotan*, I, p. 225.

F. W. Thomas: *Tibetan Literary Documents*, II, p. 183.

T. Burrow: *The Language of the Kharoṣṭhī Documents*, § 44.

以上の用例から西域記の「若」は *ñā*, *nyā* に對應するように思われるのであるが、「沙摩若」に關連しては、敦煌發見西藏文書で、

Skt. *ñā* > Tib. transc. *ḡñā*, *'ḡyā*, *ñā*

等の轉寫が見えることより考えると、この文書よりも古い玄奘の時代には、あるいは、「若」という字は *ṛiā* / *riā* の過程にあるような軽い口蓋摩擦をもち始めていたかも知れない。

拙稿：慧琳の言語系譜、p. 一六

J. Hackin : Formulaire Sanscrit-Tibétain du X^e Siècle, 1924.

2、如

この字を含む西域記の音譯語彙は13に擧げた「阿若憍陳如」の一例だけである。

3、穰

奔穰舍羅唐言福舍 (京大本二二〇一九)

穰の字を含む語彙はこの一例だけである。Pamir 地域、羯盤陀國の地名である。この語彙は、以前、羅常培氏により反轉音 (cerebral) を「日」母が轉寫した例外として扱われたが (知徹證娘音值考、史語集刊、第三卷第一本、一三九頁)、印度西北方音の音變化を考えれば、反轉音が口蓋音に變じたのは土音自體においてであり、玄奘の轉寫は、まさに、その土音の口蓋音を「日」母で表記しているのであり、例外の取り扱いをされるべきものではないのである。すなわち、

Skt. *punyasāla* > N.-W. Pkt. *pu(?)ṅāsāla*

S. Sen : Comparative Grammar of Middle Indo-Aryan, 1951, p. 31.

Konow, S. : Saka Studies, 1932, p. 172a.

唐代における中國語語頭鼻音の Denasalization 進行過程 水谷

do.: Primer of Khotanese Saka, 1949, p. 113.

H. W. Bailey: The Khotan Dharmapada, BSOAS, 11, 488 f.

4. 攘

尼攘城 (京大本一二ノ三九)

攘の字を含む語彙もこの一例だけである。干闥附近の地名で、現在の尼雅 Niya にあたり、スタイン卿發見の Kharoṣṭhi 文書の No. 518 に見える地名 *nina* は尼雅の古形にあたらう。従つて、この地名の變化は、

Khar. Insc. *nina* > **nina* (**ninyə*) > *nija*

と、う過程を進行したと考へるか、Kharoṣṭhi 文字に *n* がありながら、*n* *n* の兩字は自由な交替 (interchange) したと考へるか、何れにしても、「攘」の字は *na* (*nə*) に對應していたものであると判斷して差支えなからう。

Stein: op. cit., I, p. 311.

E. J. Rapson & Others: Kharoṣṭhi-Inscriptions, 1920~29, p. 353.

Konow, S.: Primer of Khotanese Saka, p. 31.

Bailey, H. W.: Hvatānica IV, BSOAS, 10 (1942), p. 920.

5. 阿奢理貳伽藍唐言 奇特 (京大本一ノ一五)

貳の字を含む語彙もこの一例だけである。法師傳には「兒」に作り、悟空入竺記 (天寶十年 A.D. 七五一—貞元六年七九〇西域往

遷)には「阿奢毘貳寺」と記している。屈支國(Kuci, 今の Kucha)の寺院名で、西域記の記述によれば、王が王弟の奇跡を賞して建立したということである。原註の「唐言奇特」は Skt. *āścaryya* と語義の上では對應するが、音聲の點では對應しない。堀謙徳氏が「貳の古音は *yi*」としていられるのは何に據られたか判明しない(前掲書四八頁。或いは *yi* の誤植か?)

西域記における一般の對應を考えてみると、通常、尼：*ni*、泥：*ne*、你：*ni*、貳：*ni*の關係がある。いま、貳：*ni*と假定すれば

1、梵語に語尾 *ni* はなく。

2、Kucchan において *ni* の語尾は一人稱代名詞所有格を表わすが、この時には寺院名の起原と語義的に合わない。

[Sieg, Siegling & Schulze: Tocharische Grammatik, 1931, S 273.]

従つて、「貳」は *ni* に對應するのではなく、梵語あるいはプラークリットの語尾音であろうことが想像出来る。いま、この語のプラークリット轉化を見ると [R. Pischel: Grammatik der Prakrit Sprachen, 1900, S 301.]

Maharāstri. *acchariva, acchera, accharijja.*

Sauraseni. *acchariva, acchariva.*

Jaina-Maharāstri. *acchariya, accheraja.*

Ardha-Māgadhī. *acchera, accharijja, accheraja, accheraja.*

と全般に語末の摩擦強化が顯著である(・は軽い口蓋化を表わす)。佛教梵語、中亞プラークリットにおける語尾表記 *-ya*, *-ya* > *-i* の音聲的には、おそろしく口蓋摩擦をしていたであろう。

Cf. Skt. *āścaryya* > Khot. *ašari* [azari], *ašari*, Kuch. *ašari*, 漢譯, 阿闍梨(舊譯)。[Burrow: op. cit., S 6; Sieg, 25]

Siegling & Schulze : op. cit., §32; Palatalization → H. W. Bailey : Ttāngara, BSOS, 8 (1937), p. 906.] 22

しかし、この口蓋化も、西域記が一般には「時」に対応してゐることを考えると、軽い摩擦でゐると書かれる程度のものであつた。

また中田ブランクリッターでは *-ch- > -c-* となる變化の類見や、[Skt. *āgacchati*] > Nīya Pkt. *agacati*, S. Sen : op. cit., p. 29]

以上のような特徴を考へ合せると、

Central Asian Pkt. **acari*, **accariy*……………(1)

と、この形が想定されるのであつた。

また Kuchean と *ac* > *ś* > *ś*(*ś*) の變化が現れたのは、[Kuch. *āśce*, “Kopf, Haupt”, Obl. [āścā], *āś*, Pl.

Nom. *āści*, *aśśi*, Sieg, Siegling : Tocharische Sprachreste, I, 94; W. Krause : Westtocharische Grammatik, I, (1952), p. 20.] 従つて、

Kuchean Pkt. **aś*(*ś*)*ari*, **aś*(*ś*)*ariy*……………(2)

と、この形も想定出来るのであつた。

玄奘の表記は(2)の語形に対応し、悟空のそれは(1)に対応すると見られる。

このように、「貳」は軽い口蓋摩擦を始めたものであると解するのが、諸面の状況を最も合理的に説明する道であらうし、また最も可能な姿でもある。従つて、西域記のこの言葉の「貳」という字は、「日」母の「鼻音の弱まり」を始め、破擦音的な音色をもち出した最も初期の姿であると判断出来る。

「疑」母。

1、御。

この字を含む音譯語彙は次の二例ある。

1 1、恭御城 (京大本一〇一八)

藥殺水 (Yakates) 北方の都城名で、諸種の推測がされているが決定的な解は見られない。

しかし、この音譯漢字の結合法から見れば、第一字目の「恭」が軟口蓋鼻音の語尾をもつものであるから、第二字目の「御」の語頭の軟口蓋鼻音も本来の機能を働かせていたものと判断出来る。従つて原音は不明であるが、この語間には鼻音が現われたことも想像出来るのである。

1 2、恭御陀國東印度境 (京大本一〇一八)

東部印度、今の Ganjam 地方にあたる國名である。古碑名に見える *Kongda* を對音としたものとされている。とすれば、この「御」も鼻音に對應して用いられたものと解せられる。

F. Kielhorn: *Two Grants of Dandimahadevi, Epigraphia Indica, VI (1900), pp. 133~142.* 一三六頁の記述によれば、この碑は書體から見て十三世紀より溯ぼれないものであるが、シルヴァン・レビー氏によつて *Kongda* と玄奘の轉寫との比定は確認されているということである。

2、鄂

赤鄂衍那國（京大本一ノ二五）

鄂を含む語彙はこの一例だけである。Oxus 河流域の國名である。

Alt-per. *Čaganjūn*, Mir-per. *Čakānkān*. [J. Markwardt: Wehrot und Arang, 36; V. Minorsky: *Hudūd al-'Ālam*, 353 ff.]

Arabic transc. *Šağānnyān*. [Le Strange: *The Lands of the Eastern Caliphate*, 20.]

この語の梵語形（梵衍那、鞠和衍那の類、これ等の梵語形の詳しい考證はマルカルト氏の前書に見える。）を意圖したものであるうと言えるのであるが、玄奘はイラン語その他の [ɣ] を一般に「匣」母を以て轉寫するうちでこの一例だけが例外である。また、西域記には梵語その他の *ka* および *ga* は多數見えるが、これも通常迦・伽の字で轉寫されているのである。

「赤」という字が軟口蓋閉塞音の語尾をもつものであるから、鄂の字は鼻音で始まる語頭をもつとは考えられず、いずれ軟口蓋で行う破裂或は摩擦の調音をもつて始められるものであらうと思われるが、とすれば、この鄂の字も當面の問題である語頭「鼻音の弱まり」の現象を起したものと解すべきであらうか？ 專家の御教示を得られれば幸である。

以上、大唐西域記の外國語音を表わす漢字のうち、語頭に鼻音をもつものを吟味したのであるが、不明・問題のものを残しながらも、「日」母の狭い母音がづく場合には軽い摩擦音化の傾向があつたであらうことを見得ると思ふのである。

漢譯佛典で、無聲（一符、一法、一處）、空寂、等と譯せらる梵語は、辭書では *araṇya*, *araṇya*, *āraṇya* 等と書き分けられてゐるが、これ等の語の諸種の轉訛を見てみると、

Skt. *araṇya* : Khot. *arāṇiñi* [A. F. R. Hoernle: Manuscripts Remains of Buddhist Literature, p. 253],

Niya Insc. *arawa* [Rapson : op. cit., No. 511].

Skt. *araṇya*, *āraṇya* : Pāli. *arāṇiṇa*, Pkt. *araṇya* [Turner: Nepali Dict., p. 24, 645. 現代諸方言の variants も見える。] Khot. *arāṇiṇi*, *arāṇāni* *ārāṇi(na)* [E. Leumann: Buddhistische Literatur, p. 156¹⁵; H. W.

Bailey: Hyatanica IV, BSOAS, X, 906]. Kuch. *arāṇiṇe*, *arāṇiṇe* [S. Lévi, in Hoernle: op. cit., p. 376. 368].

と種々の形を見せているが、特に、當面の問題である第三音節においては、頗る自由な交替を見せているのである。

このことは、また、漢譯佛典の音譯語彙中の漢字表記にも見られる事實であつて、譯場で使用した原音の多様性が想像出来るのである。このうち、康僧鎧の兒 (*ni⁽¹⁾*)、羅什的那 (*na*)、闍那崛多・達磨笈多・慧琳の孛 (*na*)、玄應の覘 (*na*) を除く他のものは、*o⁽²⁾*、*o⁽³⁾*、*o⁽⁴⁾*、*o⁽⁵⁾*、*o⁽⁶⁾*、*o⁽⁷⁾*、*o⁽⁸⁾*、*o⁽⁹⁾*、*o⁽¹⁰⁾*、*o⁽¹¹⁾*、*o⁽¹²⁾*、*o⁽¹³⁾*、*o⁽¹⁴⁾*、*o⁽¹⁵⁾*、*o⁽¹⁶⁾*、*o⁽¹⁷⁾*、*o⁽¹⁸⁾*、*o⁽¹⁹⁾*、*o⁽²⁰⁾*、*o⁽²¹⁾*、*o⁽²²⁾*、*o⁽²³⁾*、*o⁽²⁴⁾*、*o⁽²⁵⁾*、*o⁽²⁶⁾*、*o⁽²⁷⁾*、*o⁽²⁸⁾*、*o⁽²⁹⁾*、*o⁽³⁰⁾*、*o⁽³¹⁾*、*o⁽³²⁾*、*o⁽³³⁾*、*o⁽³⁴⁾*、*o⁽³⁵⁾*、*o⁽³⁶⁾*、*o⁽³⁷⁾*、*o⁽³⁸⁾*、*o⁽³⁹⁾*、*o⁽⁴⁰⁾*、*o⁽⁴¹⁾*、*o⁽⁴²⁾*、*o⁽⁴³⁾*、*o⁽⁴⁴⁾*、*o⁽⁴⁵⁾*、*o⁽⁴⁶⁾*、*o⁽⁴⁷⁾*、*o⁽⁴⁸⁾*、*o⁽⁴⁹⁾*、*o⁽⁵⁰⁾*、*o⁽⁵¹⁾*、*o⁽⁵²⁾*、*o⁽⁵³⁾*、*o⁽⁵⁴⁾*、*o⁽⁵⁵⁾*、*o⁽⁵⁶⁾*、*o⁽⁵⁷⁾*、*o⁽⁵⁸⁾*、*o⁽⁵⁹⁾*、*o⁽⁶⁰⁾*、*o⁽⁶¹⁾*、*o⁽⁶²⁾*、*o⁽⁶³⁾*、*o⁽⁶⁴⁾*、*o⁽⁶⁵⁾*、*o⁽⁶⁶⁾*、*o⁽⁶⁷⁾*、*o⁽⁶⁸⁾*、*o⁽⁶⁹⁾*、*o⁽⁷⁰⁾*、*o⁽⁷¹⁾*、*o⁽⁷²⁾*、*o⁽⁷³⁾*、*o⁽⁷⁴⁾*、*o⁽⁷⁵⁾*、*o⁽⁷⁶⁾*、*o⁽⁷⁷⁾*、*o⁽⁷⁸⁾*、*o⁽⁷⁹⁾*、*o⁽⁸⁰⁾*、*o⁽⁸¹⁾*、*o⁽⁸²⁾*、*o⁽⁸³⁾*、*o⁽⁸⁴⁾*、*o⁽⁸⁵⁾*、*o⁽⁸⁶⁾*、*o⁽⁸⁷⁾*、*o⁽⁸⁸⁾*、*o⁽⁸⁹⁾*、*o⁽⁹⁰⁾*、*o⁽⁹¹⁾*、*o⁽⁹²⁾*、*o⁽⁹³⁾*、*o⁽⁹⁴⁾*、*o⁽⁹⁵⁾*、*o⁽⁹⁶⁾*、*o⁽⁹⁷⁾*、*o⁽⁹⁸⁾*、*o⁽⁹⁹⁾*、*o⁽¹⁰⁰⁾*、*o⁽¹⁰¹⁾*、*o⁽¹⁰²⁾*、*o⁽¹⁰³⁾*、*o⁽¹⁰⁴⁾*、*o⁽¹⁰⁵⁾*、*o⁽¹⁰⁶⁾*、*o⁽¹⁰⁷⁾*、*o⁽¹⁰⁸⁾*、*o⁽¹⁰⁹⁾*、*o⁽¹¹⁰⁾*、*o⁽¹¹¹⁾*、*o⁽¹¹²⁾*、*o⁽¹¹³⁾*、*o⁽¹¹⁴⁾*、*o⁽¹¹⁵⁾*、*o⁽¹¹⁶⁾*、*o⁽¹¹⁷⁾*、*o⁽¹¹⁸⁾*、*o⁽¹¹⁹⁾*、*o⁽¹²⁰⁾*、*o⁽¹²¹⁾*、*o⁽¹²²⁾*、*o⁽¹²³⁾*、*o⁽¹²⁴⁾*、*o⁽¹²⁵⁾*、*o⁽¹²⁶⁾*、*o⁽¹²⁷⁾*、*o⁽¹²⁸⁾*、*o⁽¹²⁹⁾*、*o⁽¹³⁰⁾*、*o⁽¹³¹⁾*、*o⁽¹³²⁾*、*o⁽¹³³⁾*、*o⁽¹³⁴⁾*、*o⁽¹³⁵⁾*、*o⁽¹³⁶⁾*、*o⁽¹³⁷⁾*、*o⁽¹³⁸⁾*、*o⁽¹³⁹⁾*、*o⁽¹⁴⁰⁾*、*o⁽¹⁴¹⁾*、*o⁽¹⁴²⁾*、*o⁽¹⁴³⁾*、*o⁽¹⁴⁴⁾*、*o⁽¹⁴⁵⁾*、*o⁽¹⁴⁶⁾*、*o⁽¹⁴⁷⁾*、*o⁽¹⁴⁸⁾*、*o⁽¹⁴⁹⁾*、*o⁽¹⁵⁰⁾*、*o⁽¹⁵¹⁾*、*o⁽¹⁵²⁾*、*o⁽¹⁵³⁾*、*o⁽¹⁵⁴⁾*、*o⁽¹⁵⁵⁾*、*o⁽¹⁵⁶⁾*、*o⁽¹⁵⁷⁾*、*o⁽¹⁵⁸⁾*、*o⁽¹⁵⁹⁾*、*o⁽¹⁶⁰⁾*、*o⁽¹⁶¹⁾*、*o⁽¹⁶²⁾*、*o⁽¹⁶³⁾*、*o⁽¹⁶⁴⁾*、*o⁽¹⁶⁵⁾*、*o⁽¹⁶⁶⁾*、*o⁽¹⁶⁷⁾*、*o⁽¹⁶⁸⁾*、*o⁽¹⁶⁹⁾*、*o⁽¹⁷⁰⁾*、*o⁽¹⁷¹⁾*、*o⁽¹⁷²⁾*、*o⁽¹⁷³⁾*、*o⁽¹⁷⁴⁾*、*o⁽¹⁷⁵⁾*、*o⁽¹⁷⁶⁾*、*o⁽¹⁷⁷⁾*、*o⁽¹⁷⁸⁾*、*o⁽¹⁷⁹⁾*、*o⁽¹⁸⁰⁾*、*o⁽¹⁸¹⁾*、*o⁽¹⁸²⁾*、*o⁽¹⁸³⁾*、*o⁽¹⁸⁴⁾*、*o⁽¹⁸⁵⁾*、*o⁽¹⁸⁶⁾*、*o⁽¹⁸⁷⁾*、*o⁽¹⁸⁸⁾*、*o⁽¹⁸⁹⁾*、*o⁽¹⁹⁰⁾*、*o⁽¹⁹¹⁾*、*o⁽¹⁹²⁾*、*o⁽¹⁹³⁾*、*o⁽¹⁹⁴⁾*、*o⁽¹⁹⁵⁾*、*o⁽¹⁹⁶⁾*、*o⁽¹⁹⁷⁾*、*o⁽¹⁹⁸⁾*、*o⁽¹⁹⁹⁾*、*o⁽²⁰⁰⁾*、*o⁽²⁰¹⁾*、*o⁽²⁰²⁾*、*o⁽²⁰³⁾*、*o⁽²⁰⁴⁾*、*o⁽²⁰⁵⁾*、*o⁽²⁰⁶⁾*、*o⁽²⁰⁷⁾*、*o⁽²⁰⁸⁾*、*o⁽²⁰⁹⁾*、*o⁽²¹⁰⁾*、*o⁽²¹¹⁾*、*o⁽²¹²⁾*、*o⁽²¹³⁾*、*o⁽²¹⁴⁾*、*o⁽²¹⁵⁾*、*o⁽²¹⁶⁾*、*o⁽²¹⁷⁾*、*o⁽²¹⁸⁾*、*o⁽²¹⁹⁾*、*o⁽²²⁰⁾*、*o⁽²²¹⁾*、*o⁽²²²⁾*、*o⁽²²³⁾*、*o⁽²²⁴⁾*、*o⁽²²⁵⁾*、*o⁽²²⁶⁾*、*o⁽²²⁷⁾*、*o⁽²²⁸⁾*、*o⁽²²⁹⁾*、*o⁽²³⁰⁾*、*o⁽²³¹⁾*、*o⁽²³²⁾*、*o⁽²³³⁾*、*o⁽²³⁴⁾*、*o⁽²³⁵⁾*、*o⁽²³⁶⁾*、*o⁽²³⁷⁾*、*o⁽²³⁸⁾*、*o⁽²³⁹⁾*、*o⁽²⁴⁰⁾*、*o⁽²⁴¹⁾*、*o⁽²⁴²⁾*、*o⁽²⁴³⁾*、*o⁽²⁴⁴⁾*、*o⁽²⁴⁵⁾*、*o⁽²⁴⁶⁾*、*o⁽²⁴⁷⁾*、*o⁽²⁴⁸⁾*、*o⁽²⁴⁹⁾*、*o⁽²⁵⁰⁾*、*o⁽²⁵¹⁾*、*o⁽²⁵²⁾*、*o⁽²⁵³⁾*、*o⁽²⁵⁴⁾*、*o⁽²⁵⁵⁾*、*o⁽²⁵⁶⁾*、*o⁽²⁵⁷⁾*、*o⁽²⁵⁸⁾*、*o⁽²⁵⁹⁾*、*o⁽²⁶⁰⁾*、*o⁽²⁶¹⁾*、*o⁽²⁶²⁾*、*o⁽²⁶³⁾*、*o⁽²⁶⁴⁾*、*o⁽²⁶⁵⁾*、*o⁽²⁶⁶⁾*、*o⁽²⁶⁷⁾*、*o⁽²⁶⁸⁾*、*o⁽²⁶⁹⁾*、*o⁽²⁷⁰⁾*、*o⁽²⁷¹⁾*、*o⁽²⁷²⁾*、*o⁽²⁷³⁾*、*o⁽²⁷⁴⁾*、*o⁽²⁷⁵⁾*、*o⁽²⁷⁶⁾*、*o⁽²⁷⁷⁾*、*o⁽²⁷⁸⁾*、*o⁽²⁷⁹⁾*、*o⁽²⁸⁰⁾*、*o⁽²⁸¹⁾*、*o⁽²⁸²⁾*、*o⁽²⁸³⁾*、*o⁽²⁸⁴⁾*、*o⁽²⁸⁵⁾*、*o⁽²⁸⁶⁾*、*o⁽²⁸⁷⁾*、*o⁽²⁸⁸⁾*、*o⁽²⁸⁹⁾*、*o⁽²⁹⁰⁾*、*o⁽²⁹¹⁾*、*o⁽²⁹²⁾*、*o⁽²⁹³⁾*、*o⁽²⁹⁴⁾*、*o⁽²⁹⁵⁾*、*o⁽²⁹⁶⁾*、*o⁽²⁹⁷⁾*、*o⁽²⁹⁸⁾*、*o⁽²⁹⁹⁾*、*o⁽³⁰⁰⁾*、*o⁽³⁰¹⁾*、*o⁽³⁰²⁾*、*o⁽³⁰³⁾*、*o⁽³⁰⁴⁾*、*o⁽³⁰⁵⁾*、*o⁽³⁰⁶⁾*、*o⁽³⁰⁷⁾*、*o⁽³⁰⁸⁾*、*o⁽³⁰⁹⁾*、*o⁽³¹⁰⁾*、*o⁽³¹¹⁾*、*o⁽³¹²⁾*、*o⁽³¹³⁾*、*o⁽³¹⁴⁾*、*o⁽³¹⁵⁾*、*o⁽³¹⁶⁾*、*o⁽³¹⁷⁾*、*o⁽³¹⁸⁾*、*o⁽³¹⁹⁾*、*o⁽³²⁰⁾*、*o⁽³²¹⁾*、*o⁽³²²⁾*、*o⁽³²³⁾*、*o⁽³²⁴⁾*、*o⁽³²⁵⁾*、*o⁽³²⁶⁾*、*o⁽³²⁷⁾*、*o⁽³²⁸⁾*、*o⁽³²⁹⁾*、*o⁽³³⁰⁾*、*o⁽³³¹⁾*、*o⁽³³²⁾*、*o⁽³³³⁾*、*o⁽³³⁴⁾*、*o⁽³³⁵⁾*、*o⁽³³⁶⁾*、*o⁽³³⁷⁾*、*o⁽³³⁸⁾*、*o⁽³³⁹⁾*、*o⁽³⁴⁰⁾*、*o⁽³⁴¹⁾*、*o⁽³⁴²⁾*、*o⁽³⁴³⁾*、*o⁽³⁴⁴⁾*、*o⁽³⁴⁵⁾*、*o⁽³⁴⁶⁾*、*o⁽³⁴⁷⁾*、*o⁽³⁴⁸⁾*、*o⁽³⁴⁹⁾*、*o⁽³⁵⁰⁾*、*o⁽³⁵¹⁾*、*o⁽³⁵²⁾*、*o⁽³⁵³⁾*、*o⁽³⁵⁴⁾*、*o⁽³⁵⁵⁾*、*o⁽³⁵⁶⁾*、*o⁽³⁵⁷⁾*、*o⁽³⁵⁸⁾*、*o⁽³⁵⁹⁾*、*o⁽³⁶⁰⁾*、*o⁽³⁶¹⁾*、*o⁽³⁶²⁾*、*o⁽³⁶³⁾*、*o⁽³⁶⁴⁾*、*o⁽³⁶⁵⁾*、*o⁽³⁶⁶⁾*、*o⁽³⁶⁷⁾*、*o⁽³⁶⁸⁾*、*o⁽³⁶⁹⁾*、*o⁽³⁷⁰⁾*、*o⁽³⁷¹⁾*、*o⁽³⁷²⁾*、*o⁽³⁷³⁾*、*o⁽³⁷⁴⁾*、*o⁽³⁷⁵⁾*、*o⁽³⁷⁶⁾*、*o⁽³⁷⁷⁾*、*o⁽³⁷⁸⁾*、*o⁽³⁷⁹⁾*、*o⁽³⁸⁰⁾*、*o⁽³⁸¹⁾*、*o⁽³⁸²⁾*、*o⁽³⁸³⁾*、*o⁽³⁸⁴⁾*、*o⁽³⁸⁵⁾*、*o⁽³⁸⁶⁾*、*o⁽³⁸⁷⁾*、*o⁽³⁸⁸⁾*、*o⁽³⁸⁹⁾*、*o⁽³⁹⁰⁾*、*o⁽³⁹¹⁾*、*o⁽³⁹²⁾*、*o⁽³⁹³⁾*、*o⁽³⁹⁴⁾*、*o⁽³⁹⁵⁾*、*o⁽³⁹⁶⁾*、*o⁽³⁹⁷⁾*、*o⁽³⁹⁸⁾*、*o⁽³⁹⁹⁾*、*o⁽⁴⁰⁰⁾*、*o⁽⁴⁰¹⁾*、*o⁽⁴⁰²⁾*、*o⁽⁴⁰³⁾*、*o⁽⁴⁰⁴⁾*、*o⁽⁴⁰⁵⁾*、*o⁽⁴⁰⁶⁾*、*o⁽⁴⁰⁷⁾*、*o⁽⁴⁰⁸⁾*、*o⁽⁴⁰⁹⁾*、*o⁽⁴¹⁰⁾*、*o⁽⁴¹¹⁾*、*o⁽⁴¹²⁾*、*o⁽⁴¹³⁾*、*o⁽⁴¹⁴⁾*、*o⁽⁴¹⁵⁾*、*o⁽⁴¹⁶⁾*、*o⁽⁴¹⁷⁾*、*o⁽⁴¹⁸⁾*、*o⁽⁴¹⁹⁾*、*o⁽⁴²⁰⁾*、*o⁽⁴²¹⁾*、*o⁽⁴²²⁾*、*o⁽⁴²³⁾*、*o⁽⁴²⁴⁾*、*o⁽⁴²⁵⁾*、*o⁽⁴²⁶⁾*、*o⁽⁴²⁷⁾*、*o⁽⁴²⁸⁾*、*o⁽⁴²⁹⁾*、*o⁽⁴³⁰⁾*、*o⁽⁴³¹⁾*、*o⁽⁴³²⁾*、*o⁽⁴³³⁾*、*o⁽⁴³⁴⁾*、*o⁽⁴³⁵⁾*、*o⁽⁴³⁶⁾*、*o⁽⁴³⁷⁾*、*o⁽⁴³⁸⁾*、*o⁽⁴³⁹⁾*、*o⁽⁴⁴⁰⁾*、*o⁽⁴⁴¹⁾*、*o⁽⁴⁴²⁾*、*o⁽⁴⁴³⁾*、*o⁽⁴⁴⁴⁾*、*o⁽⁴⁴⁵⁾*、*o⁽⁴⁴⁶⁾*、*o⁽⁴⁴⁷⁾*、*o⁽⁴⁴⁸⁾*、*o⁽⁴⁴⁹⁾*、*o⁽⁴⁵⁰⁾*、*o⁽⁴⁵¹⁾*、*o⁽⁴⁵²⁾*、*o⁽⁴⁵³⁾*、*o⁽⁴⁵⁴⁾*、*o⁽⁴⁵⁵⁾*、*o⁽⁴⁵⁶⁾*、*o⁽⁴⁵⁷⁾*、*o⁽⁴⁵⁸⁾*、*o⁽⁴⁵⁹⁾*、*o⁽⁴⁶⁰⁾*、*o⁽⁴⁶¹⁾*、*o⁽⁴⁶²⁾*、*o⁽⁴⁶³⁾*、*o⁽⁴⁶⁴⁾*、*o⁽⁴⁶⁵⁾*、*o⁽⁴⁶⁶⁾*、*o⁽⁴⁶⁷⁾*、*o⁽⁴⁶⁸⁾*、*o⁽⁴⁶⁹⁾*、*o⁽⁴⁷⁰⁾*、*o⁽⁴⁷¹⁾*、*o⁽⁴⁷²⁾*、*o⁽⁴⁷³⁾*、*o⁽⁴⁷⁴⁾*、*o⁽⁴⁷⁵⁾*、*o⁽⁴⁷⁶⁾*、*o⁽⁴⁷⁷⁾*、*o⁽⁴⁷⁸⁾*、*o⁽⁴⁷⁹⁾*、*o⁽⁴⁸⁰⁾*、*o⁽⁴⁸¹⁾*、*o⁽⁴⁸²⁾*、*o⁽⁴⁸³⁾*、*o⁽⁴⁸⁴⁾*、*o⁽⁴⁸⁵⁾*、*o⁽⁴⁸⁶⁾*、*o⁽⁴⁸⁷⁾*、*o⁽⁴⁸⁸⁾*、*o⁽⁴⁸⁹⁾*、*o⁽⁴⁹⁰⁾*、*o⁽⁴⁹¹⁾*、*o⁽⁴⁹²⁾*、*o⁽⁴⁹³⁾*、*o⁽⁴⁹⁴⁾*、*o⁽⁴⁹⁵⁾*、*o⁽⁴⁹⁶⁾*、*o⁽⁴⁹⁷⁾*、*o⁽⁴⁹⁸⁾*、*o⁽⁴⁹⁹⁾*、*o⁽⁵⁰⁰⁾*、*o⁽⁵⁰¹⁾*、*o⁽⁵⁰²⁾*、*o⁽⁵⁰³⁾*、*o⁽⁵⁰⁴⁾*、*o⁽⁵⁰⁵⁾*、*o⁽⁵⁰⁶⁾*、*o⁽⁵⁰⁷⁾*、*o⁽⁵⁰⁸⁾*、*o⁽⁵⁰⁹⁾*、*o⁽⁵¹⁰⁾*、*o⁽⁵¹¹⁾*、*o⁽⁵¹²⁾*、*o⁽⁵¹³⁾*、*o⁽⁵¹⁴⁾*、*o⁽⁵¹⁵⁾*、*o⁽⁵¹⁶⁾*、*o⁽⁵¹⁷⁾*、*o⁽⁵¹⁸⁾*、*o⁽⁵¹⁹⁾*、*o⁽⁵²⁰⁾*、*o⁽⁵²¹⁾*、*o⁽⁵²²⁾*、*o⁽⁵²³⁾*、*o⁽⁵²⁴⁾*、*o⁽⁵²⁵⁾*、*o⁽⁵²⁶⁾*、*o⁽⁵²⁷⁾*、*o⁽⁵²⁸⁾*、*o⁽⁵²⁹⁾*、*o⁽⁵³⁰⁾*、*o⁽⁵³¹⁾*、*o⁽⁵³²⁾*、*o⁽⁵³³⁾*、*o⁽⁵³⁴⁾*、*o⁽⁵³⁵⁾*、*o⁽⁵³⁶⁾*、*o⁽⁵³⁷⁾*、*o⁽⁵³⁸⁾*、*o⁽⁵³⁹⁾*、*o⁽⁵⁴⁰⁾*、*o⁽⁵⁴¹⁾*、*o⁽⁵⁴²⁾*、*o⁽⁵⁴³⁾*、*o⁽⁵⁴⁴⁾*、*o⁽⁵⁴⁵⁾*、*o⁽⁵⁴⁶⁾*、*o⁽⁵⁴⁷⁾*、*o⁽⁵⁴⁸⁾*、*o⁽⁵⁴⁹⁾*、*o⁽⁵⁵⁰⁾*、*o⁽⁵⁵¹⁾*、*o⁽⁵⁵²⁾*、*o⁽⁵⁵³⁾*、*o⁽⁵⁵⁴⁾*、*o⁽⁵⁵⁵⁾*、*o⁽⁵⁵⁶⁾*、*o⁽⁵⁵⁷⁾*、*o⁽⁵⁵⁸⁾*、*o⁽⁵⁵⁹⁾*、*o⁽⁵⁶⁰⁾*、*o⁽⁵⁶¹⁾*、*o⁽⁵⁶²⁾*、*o⁽⁵⁶³⁾*、*o⁽⁵⁶⁴⁾*、*o⁽⁵⁶⁵⁾*、*o⁽⁵⁶⁶⁾*、*o⁽⁵⁶⁷⁾*、*o⁽⁵⁶⁸⁾*、*o⁽⁵⁶⁹⁾*、*o⁽⁵⁷⁰⁾*、*o⁽⁵⁷¹⁾*、*o⁽⁵⁷²⁾*、*o⁽⁵⁷³⁾*、*o⁽⁵⁷⁴⁾*、*o⁽⁵⁷⁵⁾*、*o⁽⁵⁷⁶⁾*、*o⁽⁵⁷⁷⁾*、*o⁽⁵⁷⁸⁾*、*o⁽⁵⁷⁹⁾*、*o⁽⁵⁸⁰⁾*、*o⁽⁵⁸¹⁾*、*o⁽⁵⁸²⁾*、*o⁽⁵⁸³⁾*、*o⁽⁵⁸⁴⁾*、*o⁽⁵⁸⁵⁾*、*o⁽⁵⁸⁶⁾*、*o⁽⁵⁸⁷⁾*、*o⁽⁵⁸⁸⁾*、*o⁽⁵⁸⁹⁾*、*o⁽⁵⁹⁰⁾*、*o⁽⁵⁹¹⁾*、*o⁽⁵⁹²⁾*、*o⁽⁵⁹³⁾*、*o⁽⁵⁹⁴⁾*、*o⁽⁵⁹⁵⁾*、*o⁽⁵⁹⁶⁾*、*o⁽⁵⁹⁷⁾*、*o⁽⁵⁹⁸⁾*、*o⁽⁵⁹⁹⁾*、*o⁽⁶⁰⁰⁾*、*o⁽⁶⁰¹⁾*、*o⁽⁶⁰²⁾*、*o⁽⁶⁰³⁾*、*o⁽⁶⁰⁴⁾*、*o⁽⁶⁰⁵⁾*、*o⁽⁶⁰⁶⁾*、*o⁽⁶⁰⁷⁾*、*o⁽⁶⁰⁸⁾*、*o⁽⁶⁰⁹⁾*、*o⁽⁶¹⁰⁾*、*o⁽⁶¹¹⁾*、*o⁽⁶¹²⁾*、*o⁽⁶¹³⁾*、*o⁽⁶¹⁴⁾*、*o⁽⁶¹⁵⁾*、*o⁽⁶¹⁶⁾*、*o⁽⁶¹⁷⁾*、*o⁽⁶¹⁸⁾*、*o⁽⁶¹⁹⁾*、*o⁽⁶²⁰⁾*、*o⁽⁶²¹⁾*、*o⁽⁶²²⁾*、*o⁽⁶²³⁾*、*o⁽⁶²⁴⁾*、*o⁽⁶²⁵⁾*、*o⁽⁶²⁶⁾*、*o⁽⁶²⁷⁾*、*o⁽⁶²⁸⁾*、*o⁽⁶²⁹⁾*、*o⁽⁶³⁰⁾*、*o⁽⁶³¹⁾*、*o⁽⁶³²⁾*、*o⁽⁶³³⁾*、*o⁽⁶³⁴⁾*、*o⁽⁶³⁵⁾*、*o⁽⁶³⁶⁾*、*o⁽⁶³⁷⁾*、*o⁽⁶³⁸⁾*、*o⁽⁶³⁹⁾*、*o⁽⁶⁴⁰⁾*、*o⁽⁶⁴¹⁾*、*o⁽⁶⁴²⁾*、*o⁽⁶⁴³⁾*、*o⁽⁶⁴⁴⁾*、*o⁽⁶⁴⁵⁾*、*o⁽⁶⁴⁶⁾*、*o⁽⁶⁴⁷⁾*、*o⁽⁶⁴⁸⁾*、*o⁽⁶⁴⁹⁾*、*o⁽⁶⁵⁰⁾*、*o⁽⁶⁵¹⁾*、*o⁽⁶⁵²⁾*、*o⁽⁶⁵³⁾*、*o⁽⁶⁵⁴⁾*、*o⁽⁶⁵⁵⁾*、*o⁽⁶⁵⁶⁾*、*o⁽⁶⁵⁷⁾*、*o⁽⁶⁵⁸⁾*、*o⁽⁶⁵⁹⁾*、*o⁽⁶⁶⁰⁾*、*o⁽⁶⁶¹⁾*、*o⁽⁶⁶²⁾*、*o⁽⁶⁶³⁾*、*o⁽⁶⁶⁴⁾*、*o⁽⁶⁶⁵⁾*、*o⁽⁶⁶⁶⁾*、*o⁽⁶⁶⁷⁾*、*o⁽⁶⁶⁸⁾*、*o⁽⁶⁶⁹⁾*、*o⁽⁶⁷⁰⁾*、*o⁽⁶⁷¹⁾*、*o⁽⁶⁷²⁾*、*o⁽⁶⁷³⁾*、*o⁽⁶⁷⁴⁾*、*o⁽⁶⁷⁵⁾*、*o⁽⁶⁷⁶⁾*、*o⁽⁶⁷⁷⁾*、*o⁽⁶⁷⁸⁾*、*o⁽⁶⁷⁹⁾*、*o⁽⁶⁸⁰⁾*、*o⁽⁶⁸¹⁾*、*o⁽⁶⁸²⁾*、*o⁽⁶⁸³⁾*、*o⁽⁶⁸⁴⁾*、*o⁽⁶⁸⁵⁾*、*o⁽⁶⁸⁶⁾*、*o⁽⁶⁸⁷⁾*、*o⁽⁶⁸⁸⁾*、*o⁽⁶⁸⁹⁾*、*o⁽⁶⁹⁰⁾*、*o⁽⁶⁹¹⁾*、*o⁽⁶⁹²⁾*、*o⁽⁶⁹³⁾*、*o⁽⁶⁹⁴⁾*、*o⁽⁶⁹⁵⁾*、*o⁽⁶⁹⁶⁾*、*o⁽⁶⁹⁷⁾*、*o⁽⁶⁹⁸⁾*、*o⁽⁶⁹⁹⁾*、*o⁽⁷⁰⁰⁾*、*o⁽⁷⁰¹⁾*、*o⁽⁷⁰²⁾*、*o⁽⁷⁰³⁾*、*o⁽⁷⁰⁴⁾*、*o⁽⁷⁰⁵⁾*、*o⁽⁷⁰⁶⁾*、*o⁽⁷⁰⁷⁾*、*o⁽⁷⁰⁸⁾*、*o⁽⁷⁰⁹⁾*、*o⁽⁷¹⁰⁾*、*o⁽⁷¹¹⁾*、*o⁽⁷¹²⁾*、*o⁽⁷¹³⁾*、*o⁽⁷¹⁴⁾*、*o⁽⁷¹⁵⁾*、*o⁽⁷¹⁶⁾*、*o⁽⁷¹⁷⁾*、*o⁽⁷¹⁸⁾*、*o⁽⁷¹⁹⁾*、*o⁽⁷²⁰⁾*、*o⁽⁷²¹⁾*、*o⁽⁷²²⁾*、*o⁽⁷²³⁾*、*o⁽⁷²⁴⁾*、*o⁽⁷²⁵⁾*、*o⁽⁷²⁶⁾*、*o⁽⁷²⁷⁾*、*o⁽⁷²⁸⁾*、*o⁽⁷²⁹⁾*、*o⁽⁷³⁰⁾*

592—594	隋 開皇12—14年	阿蘭拏 (處)	闍那曷多	大法炬施羅尼經	大正 21, 665c
601	仁壽元年	阿練拏 (處)	闍那曷多 達摩笈多	添品法華經	9, 171a
605—616	大業中	阿蘭拏 (行) (處)	達摩笈多	大寶積經第104卷	11, 586b
648—649	唐 貞觀21—23年	阿練拏 (處)	奘	無性攝大乘論釋	31, 411b
660—663	顯慶5年 —龍朔3年	〃 (〃)	〃	大般若經	5, 303c
661	龍朔元年	曷別剌 (行)	玄應	一切經音(羅什譯金剛經へ) 義(の註中に見ゆ)	大治本 2, 46b
695—699	證聖元年 —聖歷2年	阿蘭若 (法)	實叉難陀	八十卷華嚴經	大正 10, 11b
700—720?		阿蘭壤 (法)	慧苑	華嚴經音義(麗跋)〔前者へ の註〕	縮載寫 10, 109b
〃		阿蘭壤 (法)	〃	〃 (宋元明三本)〔 〃 〕	〃 10, 130a
784—807	建中5年 —元和2年	阿蘭壤 (法)	慧琳	經音義〔所收の總梵音 義を改訂す〕	白蓮社本21, 4a 大正 54, 434b
〃	〃	轉舌聲(法) 阿蘭上聲	〃	〃〔玄奘の大般若經 第415卷の註〕	白蓮社本 5, 5b 大正 54, 335b
〃	〃	阿彌反 阿彌拏(行)	〃	羅什の金剛般若 經への註中	白蓮社本10, 16a 大正 54, 368a
987前後	梁 統和5年前後	阿蘭壤 (處)	希麟	續經音義	白蓮社本 4, 5a 大正 54, 949a

種註 *araya, aranya*, の二語は「アール」意譯「佛刹梵語」では混同

が見られる。恐らくこの混同は中亞に於ていつ「漢語」に於て
したものであろう。尙「この「アール」西藏、佛教梵語に於ての
數多くの例は大谷大學の櫻部健氏より提供を受けたが、「一切音聲

中知るべきであった。茲に總編を業する次第である。

(一九五六年十一月十四日三種)

(大谷大學助教授)